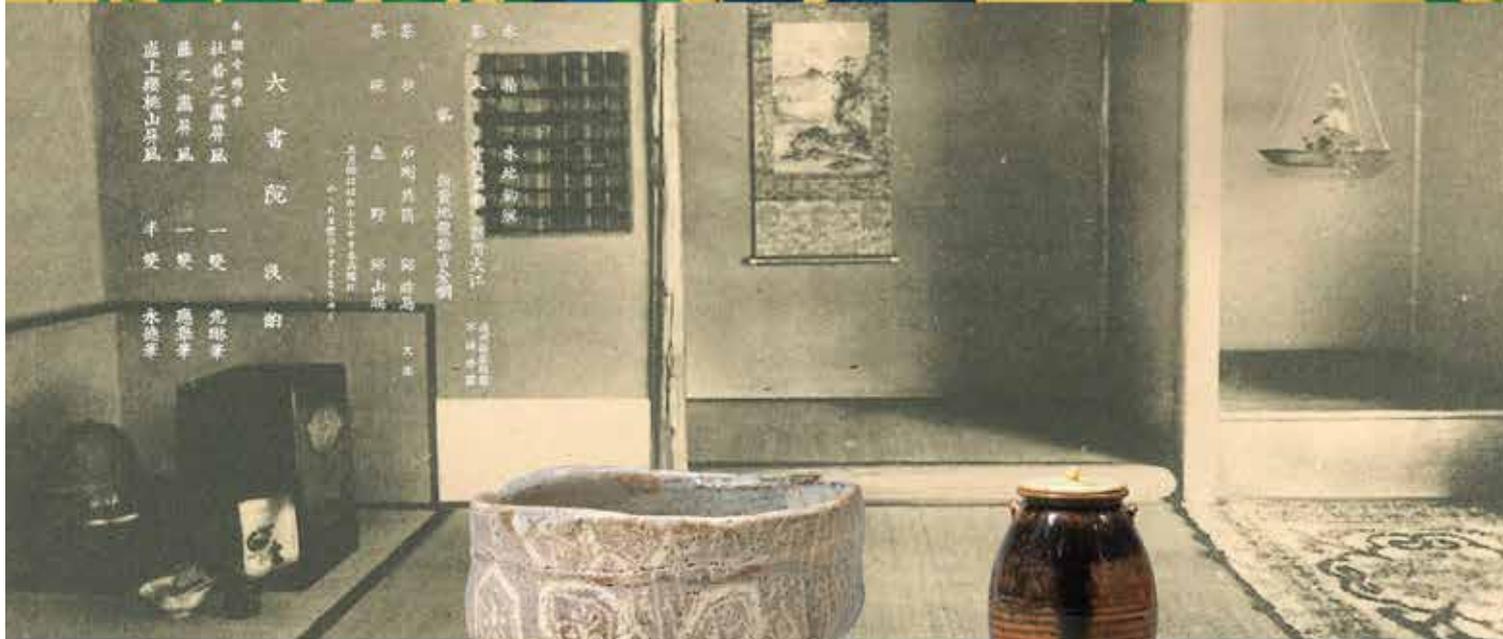


特別展
かきつばたば
燕子花図屏風の
茶会
昭和12年5月の取り合わせ



根津美術館のコレクションの礎を築いた初代根津嘉一郎（1860〜1940、号青山）が尾形光琳による「燕子花図屏風」を入手したのは大正3年（1914）。以降、嘉一郎は展覧会や茶会で、惜しみなくこの大傑作を披露しました。本展覧会は、そのうち、昭和12年（1937）5月の茶会で取り合わされた茶道具の名品と共に、国宝「燕子花図屏風」をご覧いただくものです。

この茶会は5月5日を初日とし、日に5、6名ずつを招き、約十日にわたって東京・青山の自邸で催されました。友人である実業家・高橋義雄（箒庵）や電力王・松永安左工門（耳庵）、そして政治家の近衛文麿、細川護立など政財界の名士数十名が、連日根津邸を訪れたのです。嘉一郎は、まず茶室・斑鳩庵（戦災で焼失）で客人に懐石料理と濃茶を振る舞い、続いて付属する広間では薄茶でもてなしました。そして、その後、五十畳の大広間に「燕子花図屏風」、円山応挙筆「藤花図屏風」、「吉野図屏風」をずらりと並べ、客人を驚嘆させました。そのほか、小堀遠州作「一重切竹花入 銘 藤浪」や「鼠志野茶碗 銘 山の端」などの季節の茶道具の名品も次々に披露しました。この会の取り合わせは、数ある嘉一郎の茶会のうち、ひとときわ荘厳にして豪華といえるものです。

満77才を目前にした嘉一郎による堂々たる布陣をご堪能ください。

2022年4月16日(土)～5月15日(日)

日時指定予約制

根津美術館 NEZU MUSEUM <https://www.nezu-muse.or.jp>

根津美術館
NEZU MUSEUM



絢爛たる美の競演



国宝 ^{かきつばたすびょうぶ} 燕子花図屏風
尾形光琳筆
6曲1双 紙本金地着色
日本・江戸時代 18世紀



総金地にリズミカルに描かれた燕子花の群生は、『伊勢物語』第9段、燕子花の名所である八橋の場面に想を得たとされる。薄茶席の後、「燕子花図屏風」を広げた大広間で、客人と亭主の嘉一郎による花見の酒宴が催された。



重要文化財 ^{ふじはなすびょうぶ} 藤花図屏風
円山応挙筆
6曲1双 紙本金地着色
日本・江戸時代 安永5年(1776)



「燕子花図屏風」に對峙し、酒宴の花として共に飾られたのが、写生画派の祖・円山応挙による本屏風である。同じ総金地でありながら、色鮮やかな花房と一気呵成に描かれた幹や蔓は、「燕子花図」と対照的に洒脱な美を誇る。



^{よしのすびょうぶ} 吉野図屏風(吉野龍田図屏風のうち)
6曲1隻 紙本金地着色
日本・江戸時代 17世紀

二つの名品の間立てられたのが、満開の桜の大木と和歌短冊が画面いっぱい描かれた本屏風である。本来は、錦繡に染まる秋の龍田川を描いた「龍田図屏風」と一対をなすが、嘉一郎は季節柄、本作のみを選んだ。

<ここがすごい！燕子花図屏風の茶会！>

其の一 嘉一郎の精力的な亭主ぶり

喜寿(77才)を目前にした嘉一郎が客一人一人に自ら給仕し、一同感服。

其の二 名屏風の立て直し

おまけの席を設け、茶会では飾られることのない屏風の大名品を披露。

其の三 盛り沢山のテーマ

客人に楽しんでもらうため、「燕子花図屏風」を始め、^{まつだいら ふまい}「松平不昧の茶会」「端午の節句」などテーマ設定は多彩に。

5月9日の客と共に写真におさまる根津嘉一郎(右から2人目)。正客・近衛文麿(左端)や次客・細川護立(左から2人目)の姿も。



後日招待客に配られた会記の1ページ。「燕子花図屏風」にちなんで、地にカキツバタがあしらわれている。

趣向をこらした茶会の取り合わせ



おらん だ かちようもんむこうづけ
阿蘭陀花鳥文向付
6口
オランダ 17世紀

日本よりオランダに注文して作られた向付。四角い形や蜻蛉の文様に日本人の好みが見てとれる。茶会では鱧・蓮根・椎茸・ボウフウの胡麻合が盛られた。



せ ぜ みみつきちやいれ おお え
膳所耳付茶入 銘 大江
膳所
1口
日本・江戸時代 17世紀

小堀遠州好みの小さな耳を有する茶入。「一重切竹花入 銘 藤浪」とは、出雲松江藩の松平不昧が取り合わせて以来、百数十年ぶりの再会と喜ばれた。



重要文化財
ねずみしのちやわん やま は
鼠志野茶碗 銘 山の端
美濃
1口
日本・桃山～江戸時代 17世紀

鼠志野は、総体に掛けられた鉄泥を掻き落として文様をあらわし、そこに白釉を重ねた美濃のやきもの。鼠志野の名碗として知られる本作は、この釉調を、山の稜線で初夏の白い雲が薄くなっていく様子に見立て、「山の端」の銘が付された。



いちじゅうざりたけはないれ ふじなみ
一重切竹花入 銘 藤浪
小堀遠州作
1口 竹
日本・江戸時代 17世紀

下方に向けてすぼまる姿が特徴的な竹花入。この姿を風で波のように揺れる藤の花房（藤浪）にたとえての命銘。茶会では大山蓮華一輪を入れた。



さほりつりふねはないれ ひらた
砂張釣舟花入 銘 鱧
1口 響銅
東南アジア 15世紀

扁平な形が、底が平らな川舟（平田舟）に見えることから、「鱧」の銘が付けられた。薄茶席の床脇の天井より吊るし、鉄線と姫百合が入られた(1ページモノクロ背景写真参照)。



重要美術品
あまもりちやわん みのむし
雨漏茶碗 銘 蓑虫
1口
朝鮮・朝鮮時代 16世紀

長年の使用によりあらわれた染みは、雨漏りに見立てられる。小振り、引き締まった姿のこの茶碗は、初夏に催された本茶会に誂え向きと言われた。



なりひら まき えすずりぼこ
業平蒔絵硯箱
伝 尾形光琳作
1合 木胎漆塗
日本・江戸時代 18世紀

『伊勢物語』の主人公のモデルとされる在原業平があらわされた光琳作と伝わる硯箱。最後の席で飾られ、燕子花図屏風の茶会の殿を務めたと評された。

【展示室5】^{がさん}画賛の楽しみいろいろ

絵画に書かれる和歌や漢詩などの賛。それが書かれる理由や絵との内容的な関わり、その造形性など、画賛の楽しみ方をご紹介します。



国宝
布袋蔣摩訶問答図
因陀羅筆 楚石梵琦賛
1幅 紙本墨画・墨書
中国・元時代 14世紀

禅宗で尊ばれた布袋と、布袋を師と仰ぐ蔣摩訶が対面する。情景を詠じる詩が、高僧・楚石梵琦によって書かれることで、作品の価値がさらに高まる。



定家詠十二月和歌花鳥図（九月）
尾形乾山筆
1幅 紙本着色・墨書
日本・江戸時代 18世紀

本作品は、歌聖・藤原定家が絵に描くために詠んだ十二月の花と鳥を題材とする和歌のうち九月の和歌を書し、鶉と薄を描く。書と画が渾然一体となった作品である。

【展示室6】^{りっか}立夏の茶事—^{しょぶろ}初風炉—

立夏を過ぎ、茶室で初めて風炉を用いることを「初風炉」と呼びます。これより夏向けの清々しい茶道具の取り合わせが始まります。



安南染付花唐草文茶碗 銘 童子
1口
ベトナム 15～16世紀

染付で花唐草文が伸びやかに描かれた碗。15世紀頃のベトナムで広く使われたこのような器を、日本では茶の湯の碗として愛用した。



青磁竹子花入
龍泉窯
1口
中国・南宋時代 13世紀

頸や肩にめぐらされた凸状の条線を節に見立て、「竹子」と称される花入。竹子のうちでは小振りな姿と、青く澄んだ釉色が際立つ優品である。

【展示室3】仏教美術の魅力—日本の小金銅仏—

日本では飛鳥時代から作り続けられてきた小金銅仏。この度は、飛鳥・奈良時代の金銅仏3軀と、仏像が表された仏具2点をご紹介します。



観音菩薩立像（部分）
1軀 銅造鍍金
日本・奈良時代 8世紀

※本リリースに掲載されている作品はすべて根津美術館の所蔵品です。

その他の情報

夜間開館

5月10日(火)から
5月15日(日)は
午後7時まで開館。
(入館は閉館30分前まで)



庭園のカキツバタ

作品の鑑賞とともに、カキツバタの咲く庭園の散策もお楽しみください。
(例年4月下旬から5月上旬にかけて開花します。)

開催概要

- 展覧会名 特別展「かきつばた ずびょうぶ燕子花図屏風の茶会—昭和12年5月の取り合わせ—」
- 日時指定予約制** ご来館前に当館ホームページより日時指定入館券をご購入ください。
(根津倶楽部会員、招待はがきをお持ちで入館無料の方も予約が必要です。)
- 主催 根津美術館
- 開催期間 2022年4月16日[土]～5月15日[日]
- 開館時間 午前10時～午後5時
ただし、5月10日(火)から5月15日(日)は午後7時まで開館。(入館はいずれも閉館30分前まで)
- 休館日 5月2日を除く毎週月曜日
- 入館料 オンライン日時指定予約 一般 1500円(1300円) 学生 1200円(1000円)
※()内は障害者手帳提示者及び同伴者1名の料金。中学生以下は無料。
※オンライン日時指定予約の定員に空きがある場合のみ、当日券(一般1600円)を美術館受付で販売いたします。
※2022年4月12日(火)より当館ホームページで予約を受け付けます。
- アクセス 地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線〈表参道〉駅下車A5出口(階段)より徒歩8分、
B4出口(階段とエスカレーター)より徒歩10分、B3出口(エレベーターまたはエスカレーター)より徒歩10分
- 住所 〒107-0062 東京都港区南青山6-5-1
- お問合せ Tel. 03-3400-2536(代表)
website <https://www.nezu-muse.or.jp>

当館の広報制作物に関して、郵送からメール配信への切り替えをご希望の方は、根津美術館広報課へ
どうぞお知らせください。(press@nezu-muse.or.jp)

次回展

あみだによらい
企画展「阿弥陀如来—浄土への憧れ—」
2022年5月28日(土)～7月3日(日)



誰もが知るほとけである「阿弥陀さま」。館蔵の仏画を中心として、その日本での信仰の広がりを概観するとともに、高麗の作例もあわせてご紹介します。

左: 阿弥陀三尊来迎図 日本・鎌倉時代 14世紀
右: 重要文化財 阿弥陀如来像 朝鮮・高麗時代 大徳10年・忠烈王32年(1306)
いずれも根津美術館蔵

*本資料掲載の内容は、予告なく変更になる場合がございます。最新の情報は当館広報課へお問い合わせください。(2022.2.)